WASON
HQ
1104
J74+
Feb 1894
no. 366

明治十八年初刊
每週土曜日發兌

女學雜誌

第三百六十六號

要目

砂糖のかくし所　若松賤子
やれかゞみ（讀切）　露葉
支那今代女流詩人　無名氏
つれ〴〵の記　秋葉子
家政の感　一年の主婦

明治二十七年二月十日發兌

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.
(JOGAKU ZASSHI.)

第三百六十六號目錄

社説
鑒
砂糖のかくしどこ（若松しづ子）
小説
やれかゞみ（露葉）
雜録
芝家隨筆（とよ子）
生ひ立ちの順境と逆境
長子と末子
一般婦人に對する男子の觀念と其母妻
女學生より新婦となりし人の責任
涙滴々
理學
草木の芽（けい子）

家政
下女に對する雜感
（家を持ちて一年の主婦）
史傳
支那今代の女流詩人（無名氏）
徒然草
つれ〳〵の記
（中川の里秋葉子）
文藝
同訓異義（三）
外報
万國婦人禁酒會年會
時報
銀婚式其他十數件

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第三百六十六號

明治二十七年二月十日發兌

陳言一則

主筆微恙あり、社說、隨感など未だ成らざるに、編輯の期早く到來し、本號不幸にして兩つながら之を欠く。

兒籃

砂糖のかくしどこ

若松しづ子

敏夫といふ兒は中々のもて餘し者でした。客來が有つて、伯母が菓子を買せに遣れば、持つて歸る竹の皮包の帶はいつも、ゆる〳〵になつて居升し、パンやへ遣られゝば、ねぢパンのしつぽは家へ來ぬ中にもげて居るが例ですし、お煎餅などは、鉢へ盛られるまでには、キツト二三割がた減目がたつて居升た。男の兒のお腹といへば、どれほど減りの早い者ですか?、敏夫は勝手の戸棚でも、鼠入らずの中でも、どこの隅に何が有るといふことを、一々承知して居りました。お午飯に出來たお鮓しが一皿殘つて居れば、鍋の下へ匿さうが、丼や、桶をふせて置ふが、晩までには、必ず奇麗になつて居り升た。カステラや羊羹の切は魔法でなくなるかと思ふほど迅速に影をかくし、到來の菓子折などは開けたら最後、二度と客に出すまで殘つて居た例しは有ませんかつた、甘いもの計りかと思へば、煮ものゝ殘りでも、漬物の出し置でも、時によつては、入物が舐めたほどきれいになつて居るとが有升た。ある時、敏夫の母が槲もち一鉢の匿くしどこに窮して、漸やくのとで、穴倉の中へ桶に入れて、一日丈匿くし遂せ升た。併し其一日丈で、其後穴倉は決して無事な處でなくなり、伯母が團子を仕まひ升た時などは、僅か二時間の中に丼が空になつてしまひました、鯣が二把有つたのを、戸棚の一番上の棚の空徳利の後ろへ匿し升たが、十日ほどあとで、母が煮しめにするとて、尋ねて見ると、足一本殘つて居ませんでした。そ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れから、角砂糖です、角砂糖にかけては、敏夫の食慾も一層ひどひ樣でした、敏夫は袖に入れて持つて行くものか、帽子に詰めて運ぶのか、砂糖壺の中の空になる鹽梅は話しにならないほどでした。ある時、伯母が敏夫が屛風の後ろで經國美談を讀んでる處を見つけたとが有り升。オヤ〳〵音なしく、と思ふと、何、右の手の方に、ドロ〳〵するほど濃い砂糖水を拵らへて持つて居て、樂みさうに、吸つては讀み、讀んでは吸ひして居るのでしたから、伯母もいよ〳〵呆れて、是非とも一ト工風して此癖を直さないではと心に盟ひ升た。

伯母は獨り言に、

冗談ではない、矢張り、泥棒すると違つたとはないもの、一度しつかり談じつけて遣らう。つまり躾けが足りないのだから困るよ。食氣の勝つた、聟の方の性質をそつくり繼けて居て、わたしたちの方の謹愼深い處に少しも似ないから始末がわるいよ。

といひ升た。

其翌日、丁度砂糖が切れ升たから、伯母は市へ出て、三斤丈買つて來て、幸ひ敏夫は學校へ出て留守なり、人知れず、ゆ

る〳〵と匿くしどこを探しました。戸棚も鼠入らずも駄目なり、物置も坐敷の袋戸棚も危いといふ處で、古つゞらや、蜜柑の空巢を思案し升た。何れも思は敷ないので、とふ〳〵押入の戸をあけ、自分の簞笥の上にある兩掛の蓋のないのに眼をつけ得たりと中の物を片づけ、砂糖を入れて、シヤウルを上へかけて置升た。如何に敏夫が鷹の眼を備へて居ても、まさかにこゝまでは眼力が屆くまい。伯母は軈て押入の戸を〆て、針箱の前へ坐りながら、人知れず、ニッコリ致し升た。

知らぬが佛の敏夫は午に家へ歸つて、食事を濟まし、間もなく又出て參り升た。母は伯母と午後になつて用足しに同伴する約束して居り升たから、母は早速仕度して出かけやうと催促し升と、伯母は今まで忘れて居たとて、大急ぎに縫物を片づけ、さて羽織計りでは寒いといつて、玄關から小戻りして押入のシヤウルを引さらひ升た時、ツイ其下の砂糖のとは思ふ暇が有ませんかつた。伯母は何の懸念なく、無事に用事を濟まし、夕飯前に歸り升て、さて下婢の膳立する手傳しながら、戸棚に入れて置いた砂糖壺をのぞくと、殘り少なになつた砂糖がけふは珍ら敷手をつけた樣子も有ませんかつた。伯

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

母は全躰人が好いのでしたから、此時、何とな　、敏夫が氣の毒になり、あれほど魂膽して匿しだてしたに、敏夫の方では遠慮して、殘り尠になつた砂糖は流石になめもしない、可哀さうに、子供の中は食へ度も無理がない、さういへば、さつき貰つて來た窓の月、あれでも遣りませうと、伯母は蔭ながら懺悔の積りで、紙包のまんまを敏夫に遣り升た。

敏夫の家は東京の中でも、ズット山の手で、日本橋までは二里半も行かねばならぬのでしたが、これから三四日たつて濱町の親類が、四五人遊山歸りだとて、夕方此家に立寄り升た。片田舎のことゝて、夕飯は早速間に合ず、切めて寒に搗いた餅をあべ川にして、腹ふさげに出さうといふので、伯母は敏夫の母を座敷に殘して、勝手元にいつもの通り、まめ〳〵ともてなしの仕度をして居り升た。あべ川には何を置いても必要のきなこと三盆白………それ〳〵、此の間の………はてな、敏夫に見付からぬ樣にどこへ置いたつけ？、伯母は砂糖壺を手に持て思案し升た、坐敷の袋戸棚か？、いや〳〵、蜜柑箱か？、蜜柑箱は餘り清潔でないと思つた記臆が慥かに心に殘つて居り升た。萬一物置で有つたかと思ひ、壺を片手に走つて行升たが、こゝぞと思ふ塲處が見當りませんかつた。時はヅン〳〵たつ、下婢は勝手に燒ける餅の番をして居升た。客もひもじからう、坐敷に合手する人ももどかしからうと、氣を揉むにつけて、倘と急込んで考へがつきませんかつた。仕方がない、一ッ走り、敏夫を市まで砂糖買に遣らずばなるまい、遲くなつても據はないと、伯母は敏夫を捜すと、何、直間近の丸窓に寄つて、明日の課業を見ながら、折々眼を擧げて、伯母の心配さうに走り廻る樣子を不審して居り升た。

伯母は口早に、

敏や、おまへ、大急ぎで砂糖やまで行つて來ておくれな、早速要るのだから、三盆白を一斤ヨ、サ早く〳〵。

なんです、伯母さん、砂糖なんか、家に澤山あるじやないか？。

伯母はヂリ〳〵して、

さうさ、あるとは三斤もある筈だが、おまへに見つからない樣に匿くしたんだよ、おとつ日のとき、さうすると、ツイ置處を忘れて、今首を斬られるつたつて、置塲處の考へがつかないんだヨ、おまへ………だから、急いで行つて來

て、おくれつてへば。

敏夫は落着拂つて、フヽ〳〵と鼻の先で笑らひ升た。

伯母さん、さうなら、さうつて、早くいへば好いに、其となら、伯母さんの簞笥の上の兩掛ノ中にはいつてるじやないか。おまけに、今度のは大變頁い砂糖だよ。

本ツに、さうだつたつけ、シヤウルを好工合に上へ被せて置いて、餘處へ出る時、とつて着てつて、すつかり忘れつちまつたんだ。其時だに、おまへが見付けたのは、性のわるい兒だ！。

さうだよ、伯母さん出て行つてから、たこの糸搜しに、押入開たんだよ、直つき香がするもの、だけどチ、どこへ置たつて、一日二日の中にやア、見付かるよどふせ。

本當よさうだらうよ、氣味のわるい樣な兒だチィ！

伯母は此日から、敏夫に根負けして、何も匿くしだてしませんでしたが、其代りに、近頃は敏夫の德性を喚醒して、親ゆづりの食慾を制限する樣に頻りに盡力して居るさうですが、敏夫は伯母の苦心を察して、少こしは愼しむ樣になつたかどふですか？。

小説

やれかゞみ。

上の巻。

露葉

けふしも八月二十三日とて、玉藏院に施餓鬼あり、鐘は無常をつげて、人をあつむる響賑はしく、常には廣き境內も、みせ物、氷、水菓子、おもちや、小間物、それ〳〵の小屋を張り店をつらね、人を招く聲々いさましくかしましく、近きわたりより遠きは數里を隔てし村々まで、引連れて集ひ來る幾百幾千の人々のあふさきるさに、足の踏所も見えぬばかり、やがて夜となれば、本堂の燈明も光を增し、店小屋の燈火杉の梢を照して、天を焦すべき在樣、實に一年に唯一度のみの今宵なりける。

この熱き中に、獨秋を弄ぶむし賣の前には、若樣むづかりたまい、簪の花美しき店には、姫君觀惚れ給ふ、水は露となり

て玉麗はしき植木屋に、花の色、木振の美惡を見て、値の詮議したまふ官員樣あれば、荒物買ひ行く女房もあり、さても町の人は、さすがに都ぶり見にくからねど、田舍の人の姿ぞをかしき、白地の浴衣に一際目立ちながら、眞桑瓜くらひて、其友と語るは、月旦する色やありけむ、髮つやゝかに緋鹿子絞はながけに結びて、領のほとりより目ざましきまで白きに、何やら食べる御手元の、墨くろ／＼と拜まれしこそ口惜けれ、なべて此夜の群は、にほひある人のみおほし。

此所をいでゝ北の方へと步をはやめて行く少女を慕ふ若き男あり、お歸りですか、御一所にまゐりませうといへど、振向きもせで、私は急ぎますからと早言にいひて、追着れじと猶も急ぎて、軈て家に歸れば、挨拶を能くもえせで、汗に濡れて氣味わるき浴衣を着更へ、少時團扇に身を委せぬ。

さて母は賑はふ景色を觀むとて出行きければ、唯一人、繪の色に涼しさ見ゆる椽の美しき提灯を嗜ながら、吹入る風をたのしみける所へ、つと入り來りし以前の男、おひとりですか、おつかさんは。今お施餓鬼へまゐりました。 先刻はおいそぎでしたね。どうもすみませむ、おふくろを早くやらうとおもひまして。おなみさんの孝行は評判ですぜ、實に、感心して居るのさ私も。どうしまして、念ふばかりでなか／＼。しかしお宅も、おなみさんとおつかさん二人ぎりぢやおさびしいでせうね。いえ、さうでもございませむがね、また考へると心細くもなりますの。さうですとも、別にこれといふ御不足の無いお家でも、男といふものが居なくては、何かにつけて御不都合があるものです、といひておなみの面を瞻れば、私がもつと容色が好いと、聟に來てくださる人もございませうけれども、十九の今日までもひとり身で暮すやうなものですから、といふを抑へて、顏や形で出來る夫婦には、ろくなものはありませむ、何でも心懸が肝心ですのさ。それもさうでございますけれども、私なんどは、到底一生埋木で送るのです。なあに、そんな事があるものですか、今すぐでも聟になりたいといふ人があります。半さんは吁詐ばかり、誰がこんな者を。なか／＼さうでありませむね、しかし其人が、おなみさんのお氣にめさないだらうとおもはれます。私は何も彼是はまをしませむ、唯おふくろを大切にしてさへくだされば、それでよいのでございます。それはもう、親を大切にするのは

當然の事です、しかしまづ、第一おなみさんのお氣にいらなければ仕方もない事です、といひながら窺へば、おなみは首を低れて、實は、とうから此方ならばとおもふお方の無いでもありませむが、到底およばない僭上事とあきらめて居るのです、といふ顏の薄暗き提灯の火影にさへ、紅うなりぬるを知られき、さても言葉は絶えぬ、絶えて猶續くものは、檐端の籠に飼はれたる月鈴兒の、闇を切ていともさやかに唧く音のみ。

中の卷

明治二十一年三月十五日の朝の九時すぎて、頓て半にもなりつらむとおぼしき頃、遽に打續くる半鐘の響、折しも吹きける烈風につれて此町をおどろかしぬ、すはや大事とおもふ間も無く、火は諸所に飛びて、勢いよ〳〵猛く、うろたへ騷ぐばかりに消防の力およばず、庇に焔の奔るを見ても、家財取出すべき氣色なき者あれば、遠く風上に在りて、疊まで擔ぎ出せしもあり、猫を抱きて逃るあり、神棚佛壇を背負ひて走るあり、人に號ぶあり、母を呼ふて聲を嗄すあり、少しばかりの物を取らむとて炎に追はるゝあり、恨めしげにわが家の迹を眺むるあり、重き物を左程にもあらぬ女の、一人して持運ぶあり、さても寔に此町は狂ひぬ。

おなみの家も、この災に罹りしが、火の移り來る迅速なりければ、何を出す間もなし、あまりに口をしと、母の言葉も聽かで廻り入る時しも、噴出す焔に面を搭たれて其まゝ倒れぬ、折好く來りし半次郎、肩におなみを拯ひ、母の手を執り、吹き飛されなむ風を冒してぞ逃延びにける。

近郷近在はいふまでもあらず、遠き町々村々より馳集りし人人の力と、風の力のやう〳〵勢を失ひしとにて、甫てこの火の鎮りし時、はや黄昏の色は來りき、さても四百餘戸と倶に灰となりける貨はいかばかりなりけむ、此日東京に灰の降りしは、この灰の遠く飛行けるなり、寔にも浦和の大火はこれにぞありける。

此夜は天曇りていと暗し、廣き原となりたる此燒跡を觀てければ、何やら積重りたる所は、今も猶燃えつ、彼所此所と幾百幾千の火の光、のぼる烟の朦朧たる下より見はれ、鼻を突く臭は咽ぶばかり、あはれこの烟の下には、幾千の人の懷ふ

念を拂りたりけむ。

半次郎が家は燒ざりけり、此家におなみは苦痛に臥して、母とこの男の介抱を受けつ、短からぬ日の光を消しぬ。

そも〳〵半次郎は其姓を風間といひて、おなみの家とは淺からぬ因緣あるよし、今は他に親族なく、獨身にて、今年二十五の醜からぬ男なり、さればひそかにおなみを羨む少女もあるよし。

かくておなみの苦痛は愈えぬ、今はしも床を離れて、髮も久しく櫛を入れねば心地惡し、いで搔上げむと鏡に向へば、さてもこれがわが面影か、嗚呼これをいかにせむ、竟に心も姿も亂れ擾れて、前なる鏡を破れり、毀りたる鏡に復わが顏を照してさて、微塵になれと打つけたり。

下の卷

天にも地にも唯一人なる老母の介抱に、おなみの病は日ならず愈えてけり、されど優れたるにもあらざりし容色の、今は猶いとゞ醜くなりにける、老母はこれを心苦しく思ひて、朝暮、神に禱り佛に願ひては、おのが命をも惜まざりけり。

かくて蚤蚊に攻られて夏を送り、月を賞するにもあらで秋をくらす、秋は空の變り易きものなりといへど、世はこれのみかは。

もうお歸りな、あんまり遲くなると、あの子が案じるからね、そんなに追立なくつてもいゝやな。さうぢやないやね、おなみさんが案じるといふことさ。今にも知れねへ病人や、女才次郎の側はいやなこつた、女才次郎たあひどいね。それでも小間物屋才次郎の女形よろしくだもの、あんまりさういへた義理でもないのさ。昔は昔、今は今よ。しかし半さん、お前もあんまり薄情だね、あの親子にやあ、なか〳〵世話になつたとおいひぢやないか。でも、この春の火事以來、こつちの世話で差引よ、着るものも何も灰にしてしまつたのだもの。それはそれとして、おなみさんが。だから、昔は昔、今は今だといふことよ。それでも此頃は、おなみさんや病人に、つらくあたるといふ話だね。ばあさんは死ぬとも生るともして、はやく何所へかいつてしまへばいゝんだ。だが、おなみさんだけは置く方がいゝやね。馬鹿いへ、男がさがらあ。おや、これは失禮、といひながら、女は杯を薦めぬ、あはれ、男は、この咲面に殺されずや。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

夜は深し、月さえて調の宮の杜影黒し、軒の瓦の白き夜は霜やおきけむ、今まで吠えにし犬の聲も息みつ、萬籟沈みて、獨、月のみぞ語りがほなる、此時、この杜のほとりの、とある家より、立出たる一人の男あり、あゝこの寒さに、北へ向つて行くのは難儀だなあ、折角、ひとがたのしんで居たら、こんな事だ、醉た酒も醒てしまわあ、ばか／＼しい、しかし、ばあさんが死ねば誠にありがたい仕合だて、さうなれば何とか法をかいて、うまいぞ／＼と獨かたりつほゝゑみて、あゆむ足下寒さに急がれ、やがて來りしわが家の門、内の樣子を覘へば、近所の人々集へるが如し、さて部屋に入れば、おなみは姿も亂れ聲もえたてず、前後不覺に泣き倒れてぞありける、寔にも老母は、今たゞ數分の前に、この世を逝りけるなり。

かくて、腸を斷つおもひして葬に送りつ、七日七日と冬の日はやく消えて行く。

月日は急に過ぎて、二十二年もきのふとなりぬ、この歡天喜地の中、浦和監獄署牢內に今出川おなみ、うたてやうたかたの泡と消えぬ。

今出川おなみは、怨むべき節のありて、去年六月二十一日の眞夜半、風間半次郎をあやめ、倘その妻に傷を負せてさて、囚はれて今も獄舍に居たるなりけり。

一基の碑には數多の名を刻み、在監人合葬墓と表せり、一本の卒塔婆には、悉曇章に偈をも誌せり、此を圍みたる垣に添ひ、碑の左右に、竿を力に細き二本の松樹てり、このうしろに標おほく列なる、標は短き細き材なり、これより外に埓あり、埓の外に道あり、人行き、馬馳せ、車過ぐ、道を隔てゝ林あり、前も右も林なり、たゞ左なる東の方のみ開けて畑廣し、畑をへだてゝ、浦和の町の、成就院、玉藏院、調の宮の森、郡役所、縣廳、裁判所の屋根、特に、監獄署は稍近ければ、その屏までも見ゆ、されど街は見えず、此所ぞ清谷と呼ぶ地なる。

この葬の標の中のあたらしきは、今出川おなみにして、明治二十三年一月一日病死、行年二十一年十ヶ月、夫に並びしは、おなみが生みにし男兒にて、明治二十二年十一月二日死亡、是は唯生後八時間と記せり。

今や木立は未だ冬のまゝにして、音するものは松風のみ、あはれ此等の人の命の紀念なる細き標を、渺くも照らすかたわれ月は、遠く東の杜の梢にその月魂白く、吹て過ぎ行く曉の風寒し。

（をはり）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄

芝家隨筆

ふみ子

○生ひ立ちの順境と逆境

和氣洋々として春の如く温かに、家族相[illegible]る家庭に於て人となり、若くは平坦なる境遇をのみ經來りし人は、何處となく無邪氣にて人と親しみ易く、人も亦かゝる人に接しては自ら平和の念起りて、自他共に樂しきものなり。されど之れに反して、幼きより秋風颯々として枯葉を拂ふが如き蕭殺なる家裡に人となりし人、若くは不調和なる家族の間に立ちて、猜疑嫉妬等の念に圍繞せられ逆境をのみ辿來りたる人は、何となく愁の雲額にかゝり居るやうにて、容易く人に心を許さず、常に人に對しての戒嚴を徹せず、故に人も亦かゝる人に接すれば、何となく其間に墻壁あるが如き心地して打解けぬものなり、故に此種の人は、自らも常に心樂しからず、又人をも不快に導くなり。此兩樣の傾きは、其人の年齒如何に加はり、又其心意の修練成れる時に於ても、何處となく其性行の上に顯はるゝとあるものなり。されば自ら温き家裡に人とならず、又逆境にのみ處し來りしと思へる人は、人に接するに際し深く自ら注意して、充分に胸襟を開くの心得なくんば、人をして知らず、知らざるの間に惡感情を催さしむるとあるべし。而して又かゝる人に接せむ人は、心して惡感情を起さず、普通人に對するよりは幾倍の誠實と愛情とを以て接するを要す。然らざれば到底かゝる人の心を和ぐると能はざるべし。

○長子と末子と

諺に總領の甚六といふ事あり。其諺は土地に依りて異なるべけれど、ツマリ長子はぼんやりしたるものなりとは何れに於ても定め居るもののやうなり。されど是は惡しき方面より評したる言にして、善き方よりいへば、總領の子は概して温和なるものなり。之れに反して末子は多くダヽツコと極まり居るやうなり、而して之れを善き方よりいへば負けぬ氣とも

なり、惡しき方よりいへば我儘となる。此定め强ち當れるや否やは知らざれど長子と末子とは確に其性行上異なる點あるを發見するを得べし。されば人を知らむには、其人の長子なる乎、末子なる乎を明らめ置くを要す。而して後人物の評を下せば、恐らく其外形を徹して、其眞相を窺ふことを得るなるべし。勿論之れを唯一の條件とはいはず、然れども此の差別は、恰も彼幼時の家庭、過去の境遇などが人の將來の性質に關係を有つが如く、何樣かの影響を及ぼすべきものなると信ず。

○一般婦人に對する男子の觀念と其母妻

人の智識は全知なるものに非ず。既知の或る者を以て未知の或る者を推するに過ぎず。されば日本の如く男女相知るの途未だ開けざる國に在りては、男子は其母妻に依り、女子は其父夫に依り以て一般男子の品性を推知するの外なし。且し他にありとするも、己れが母妻若くは父夫の如く、常に他の男女を觀察するの便宜を有つ人は少かるべし。故に多くの婦人は一般男子を知るに其父夫を標準とするが如く、男子も亦其母妻を標準として一般婦人を推するなるべし。さればこそ倩々世の男子を見るに、婦人を土芥視するの人は多く鄙しむべき婦人にのみ接して、未だ婦人の眞光輝を認めざる人に多く、內に賢母良妻の助けを感ずるの人は、從て一般婦人の上にも重を置くに至るものゝ如し。是蓋し免るべからざる事ならむ。今其一例を擧げむに、予は嘗て今の文壇に多少名ある一小說家が、其小說に描き出せる所の婦人の、常に碌々たる他の小說家が描く所の婦人に似もやらず、稍高尙なるもの多きを見て、其小說家は女權論者なるかを訝しみ、之れを其知れる人に質したるに、其小說家の細君は、相應の教育を受けたる貞好なる婦人なりとの答を得て、始めて其人の女權論者に非るも、婦人に對する觀念の稍高き所以を覺りたりき。是は畢竟其一例に過ざるも、世間必之れに似たる事は多からむ。されば今日久しき以前より辱めを受けたる、一般婦人の地位を回復せむと志す婦人は、先づ銘々注意して、同居の男子に賤まるゝことなからむを要す。然らざれば假令幾多歐米賢婦人の例を擧げ、若くは男女同等なるべき筈のものなりとの理論を主張するも到底其効果なかるべきなり。斯くして不言不語の間

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

に己れを愼み己れを修め、久ふして諭らずんば、假令如何に習慣上婦人を土芥視し居たる男子にても、自ら婦人の眞價値を認むるに至り、良人はかゝる細君に倚信し、兒子はかゝる母公を尊崇するの結果として、遂に一般婦人に對する觀念をも改むるに至るべきなり。

○女學生より新婦となりし人の責任

女子敎育といふとは、日本の社會にては、未だ新らしき事なれば、既に理論上一般に其必要を認められ居る今日にても、猶且實際に於ては、娘を女學校に送るを否とするの父母も多きやうなり。而して其人達の言を聞くに曰く、今の女學校の敎育なるものは、娘に學問を爲さしむるには宜しかるべきも、良妻として他家に嫁せしむるには不都合なり。又實際女學生上りの細君は嫌ふ人多し。故に予は娘に學文を爲さしむるを好まずと。是素より正論とはいふべからざるも、多數の俗論は常に少數の正論よりも勢力あり。故にかゝる量見を抱く人多ければ、從て女子敎育の進路に妨なしといふべからず。故に今日女學生たるの境遇を經て新婦となりし人は、後進女學生の前途を妨げざらむが爲め、深く其責任を重んじて、其身を謹まずんばあるべからず。思ふに今日の女學生たる人が細君となりたるの場合に在りて多く受くるの批評は、普通の婦人よりも其學問は如何にも高遠なるも、却て日常の家事に踈なると、普通婦人に比して其行跡如何にもづろうにて男學生の如き嫌ありといふなど一々其言を擧ぐれば、素より枚擧に遑あらざるも、つまり婦人の婦人らしき行を缺くを以てといふにあるが如し。されど女學生とならざりし婦人とて、一一其躬行修まりて一點づろうなる事なく、又始より家務を辨じて失策なしといふ人のみには非るなり。されど、凡そ新らしき事には人の着目すると多きものなれば、他の婦人に在りては眼立たざる缺點も、一度女學生たる人の行に上れば忽ち批難の聲を大にするとなるべし。斯く一方には寛に、一方に酷なるは甚其當を得たるものに非れど、今日の女學生たるものは素よりかゝる事に論爭なし居るべき塲合に非ず。兎に角人の言に傾聽して己れを省み、出來得る限り人の批難を招かぬやうにして、女子敎育の進路に妨を來さゝる覺悟を有つこそ肝要なれ。殊に新婦として他人の家に嫁するや、舅姑は

眼を缺て、其往時の婦人にあらざりし失行を數へ、婢僕は之れに事へて其家事に迂なるを侮り良人は彼是の譏言を聞て、或は實際に然るやを疑ひ、悉く之れを女子教育の罪に歸するとあるものなり。然る時は一新婦としての缺點は一般女子教育に影響を及ぼすとなるものなれば、今日新舊過渡の機に際し、女學生より新婦となりし人の責任は、實に重大なりといふべきなり。

涙滴々

風吹きあるゝ夜半に獨り起き上りて
ふきすさむ風はなか〳〵數ならじ
　あらき浮世の波くゞる身は
また月にむかひて
窓さして埋火かこむ人ごゝろ
　つれなしとのみ月やてるらん
また
幾千たびながめてかはる我こゝろ
　明日の月をやいかに見るらん

理學

草木の芽

磐子

過ぎにし夏の深緑も、去る秋の錦木も、時雨によそほひを改めて、今は早や、僅に枯木寒鳥の雅致を止むるに過ぎず、冬枯れどきのかゝる、しづけき景色を、庭下駄の音に踏み破りて、立ち出る畧形の乙女、木の下近く歩み寄り、枯枝にまつはりて、綻びやせん、破れやせんとの、心遣ひにや、ふりの袂兩ながら脇ばさみて、木々の梢そこゝと、叮嚀に見上る目元餘念なし、折からワア、トと一聲、笑ひ混りの幼な聲を、揚げつゝ、背面一擊、乙女の顏見上ぐる弟娘　妹「アラ厭やだこと愕りしましたよ　妹「姉チヤン何していらつしやるの花も實も葉も何にも無い、枯木なんか見たつて、ちつとも面白くはないぢやありませんか、それよりお部屋にいつて、巨燵にでも、あたろうではありませんか、姉「ソリヤ花や實のある中が、好には違ひはありませんが、鳥渡、マア御覧此芽を、此可愛

芽を、芽の中には、皮の内にあつて、よく見へないのもありますが、此等の芽が延びて、花にも葉にも枝にもなるんですよ、ソヲあなたが奇麗だつて眺める花も、欲がつて採る實も、皆此中にはいつてゐるんです、妹「ヲヤソウそれでは、大事な大事な芽ですねへ、こんな小さいものでも 姉「アヲおよしなさいよ、そんなにひねくつたり、皮を剝たりしては、いけません、その鱗の樣なものは、芽の着物ですよ、其れをとると芽が生長しませんよ、寒地や温帶の植物の芽は、大抵そんな物を被てゐます、此鱗の樣なものを被て居る芽を、鱗芽と云ふて、裸のものを裸芽と云ひます、裸芽は熱帶植物に多く出ます、妹「姉チヤン、コヲラ、此芽を摘んだら、手がべたべたしてきましたよ、姉「エヽソウデセウ、鱗芽の包被には、漆のやうなものを分泌して、水濕を防ぐのもあるし、柔毛を生じて、水氣を防ぐのもありますもの、而してあなたが、摘んだのは、葉がでる葉腋と云ふ所に、出來る腋芽と云ふ芽ですが、アレ彼の枝の先端についてゐる頂上の芽は、頂芽と云ふて、あの芽が延びて木や枝の丈を長めるのです、又此芽のうちで、延びて綻びると、花になるのを、花芽と云ひ、葉になるのを葉芽と云ひます、妹「デワネ、姉チヤン八重櫻のやうに、葉と花と一所に、出るのは何てうのですか、姉「あれですか、彼の八重櫻のやうに、葉と花と雜つて出るのは、混芽と云ひます、それからまだ〳〵妙なのがありますよ、百合の葉と莖の間に出來る、小さな珠や、野山藥の蔓と葉の間になるむかごも、矢張芽です、あれを蒔いて置くと、芽が出て獨立の植物となります、あゝいふ芽は、肉芽と云ひますよ妹「アア何んだつけそう〳〵鱗芽裸芽、腋芽頂花、花芽葉芽混芽、もう一ッ肉芽と、姉チヤンそれぎりかへ、姉「まだありますとも、ありますとも、嫩枝には頂芽腋芽と、きまりがあるけれど老枝には、此定りがありません、定りなく葉腋より遠く、離れて出來る芽を、不定芽と云ひます、又腋芽の出來る所へ、いくつも集りて、出來る芽を副芽と云ふし、毎には皮のうちに隱れてゐて、他の芽が枯れ朽るとき、出て來て其代りに、發生するものを潛伏芽と云ひますよ、此潛伏芽は五年も六年も、外部へ發生いとがあるそうです、妹「もうそれぎり 姉「マア芽のことは先づ大抵こんなものです、けれど此芽が生長して、發生る、花や葉のことにつきては、種々面白い談が澤山ありますよ、今日は寒くもあるし、此處に長居も出來ませんから、又其内に閑な日を撰んで重ねて談しませう。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

家政

下女に對する雜感

家を持ちて一年の主婦

○家内に於る仕事の内、是は細君自ら爲すべき事、是は下婢の爲すべき事と夫れ〳〵豫め取極めて置いても、其日の都合に依りては、下婢の爲すべき事を屢〻手傳つて遣られば(ママ)ならぬ事があり升。夫も臨時に用事の殖へた爲め間に合はなかつたのならば致し方もあり升ぬが、中には兎角グツ〳〵して、毎日キマリキツたる事をも、其日の内に爲し兼ぬる下婢もあり升。否寧ろかゝる下婢の方が多きものです。かゝる下婢に對しては、隨分めんどうにて氣のもめるものであり升が、去りとて之れに對して小言をいふ計りでは何の効もあり升ぬ。夫れよりは何故に仕事がはかどらぬかといふ其原因を見出して、夫れを改めさすやうに工夫せねばなり升ぬ。先づ第一に仕事の順序を立てさすが肝要です。順序を程能く致し升ぬと、兎角餘計な手間がかゝるものです。年のゆかぬ下婢などは、多く此順序を誤る爲に用事が前後になり升て、一日ゴタ〳〵と致して居るものです。之れを言ひ換へ升れば手廻しを善くすると申事です。かゝる注意を加へて夫にても間に合はぬ時は、手傳つて遣らねばなり升ぬが、扨其手傳ふて遣る時に怒つてはいけ升ぬ。怒つて致し升時には、下婢の方でも決して感謝致し升ぬ。扨て今にしやうと思つて居たものを、氣の短い奧樣だと思はせ升。夫故折角奧樣の方では手傳て遣ても、下婢の方では奧樣の勝手で急いで居るとしか見へ升ぬ。夫故かゝる時には何も小言らしきことをいはず。偶に下婢の勞力を助けて遣るといふ好意の心持でだまつて爲て置くが宜しい、そうすると下婢の方でも氣の毒に思ひて自然奧樣の手を煩さぬやうに氣を注けるやうになり升う、之に就て一例を擧げ升うならば、玆に一人の奧樣があり升て、平常下婢よりも朝晩く起きるが例なるに、たま〳〵ある朝下婢が寢過して、雨戸がまだ明けてなかつたとて、何か小言らしき事をいひて、手暴く明けなど致し升ならば、如何に其徳を損じて、下婢の侮りを招くであり升う、かゝる類の事は往々見聞する事であり升から、氣を注けねばなり升ぬ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

○諺に鍋釜と女子の正月はないと申升通り、家族の中でも、細君と下婢ほど、年が年中休息する間のないものはあり升ぬ。正月とか祭りとか申せば、猶更忙しひ思ひをせねばなり升ぬ。けれども細君は主婦たる以上は仕方があり升ぬが年若き下婢などは、矢張人の遊ぶ時には遊びたいものです、故に成るべくかゝる時には細君が下婢の仕事を手傳つて遣り、下婢は少しでも正月や、祭りらしい思ひをさせてやらねばなり升ぬ。彼の正月に何れの土地でもの習慣として、澤山煮染めを拵らへて置升のは、來客の用に供ふる爲でもあり升うが、一ッは年頭何ヶ日かの間だけでも、鍋釜や女子の手を省くやうにとの意味も籠つて有るヿと存じ升。夫故或家では、正月三ヶ日の間は、來客のありし時と朝の雜煮を祝ふ時の外は、下婢を休ませる爲に、家内中誰でも晝のと夕の食事をする時には、銘々に茶碗や皿を持出して、思ひ〳〵に有り合せの煮染にて、食事を濟すヿとして居るがあり升。一槪に其通りには參り升まいが、何日でも休むヿの出來る人はかゝる時には休まぬやうにして、平常休まれぬ人達を、一般の休み日に、休ませるやう致すが宜しからんと存升。

○奥樣は、いかにても婢僕より奥樣といはるゝやう心掛ねば、なり升ぬ。全躰下賤のものは口の惡きものとはいへ、かげにて奥樣を奥樣と思はぬは、何處にか奥樣らしからぬ處があるからであり升。夫故若し婢僕が自分を譏つて居るヿが分り升たら、先づ己れの行を省みるヿが肝要です。

○斯く一方にはいろ〳〵注意せねばならぬヿがあり升が、去りとて是計りではまだ充分に善き結果はあり升ぬ。故に又他方で時を定め折々種々の説話をして、婢僕の道義心を起さすやうにせねばなり升ぬ。さうでないと婢僕によりては、只つけあがりて我儘になるものがあり升。夫故にこちらからは充分寛大にすると同時に、彼方には責任といふヿを感じさせるが大切です。

二月

明治八年二月二日女子師範學校東京に創設せらる
明治六年二月七日復讐嚴禁の令出づ
明治廿三年二月十一日金鵄勳章を創設せらる
建久三年二月十六日西行法師西京に卒す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

史傳

支那今代の女流詩人

詩人の天分男女寧ろ別あらんや、さるをわれ古來の詩人の男に多くして女に尠なきを憾とせり、頃日偶ま手に隨ふて架上の書を亂抽して支那今代の女流詩人繡孫なるものを獲たり、乃ち其の詩の二三四五六七を抄出して我邦の名媛諸卿に紹介せんとす顧ふに我邦の今日雲の如きの名媛諸卿中に在て必ず此の繡孫に勝さる閨秀詩人あらん惟だわれの未だ知るを得ざるを恨みとなすのみ。

今や此の女流詩人の詩を紹介するに當て一、二彼女の性行を紹介せん、彼女生れて明慧幼時其父授くるに毛詩國風及び唐詩等を以てし決して他書を讀ましめず而して彼女酷だ詩を嗜む人の詩集を見るあらば輙ち取て以て之を觀る一日父彼女に向ふて曰く汝は能く詩を解し得るかと彼女答て曰く否な父よ解し得ずと父笑て曰く汝我を誑むるゝなきか解し得ずして猶ほ能く終日卷を釋てざるあるか一日父題を設けて詩を賦せしむ彼女略ぼ一思して七言絶句一首を成し父に示す素より巧と云ふべからざるも亦た自然に聲律を具ふるあり父見て私かに驚きたれど却て其の穎なるに過ぎて或は久しく人間にあらざるかと私かに彼女の母と共に愁ひ居たり父の愁はとわりなりしなり彼女はまことに薄命なりし然り彼女は三十四歳を一期とはなしたり。

彼女は年期到りて許氏子原なる者に嫁したり子原も亦た詩を能くせり子原家本と大族なりしも少して孤なりしより其家事日に落ち子原亦た久しく江湖に落泊冷官幾年而して彼女此の間に處して備さに世波の艱難辛苦を嘗むるも怡然之れに安んじ常に良人と相共に詩を相ひ唱和して樂みとなすを見れば其琴瑟の和樂も亦た想察すべきなり彼女の父は頗る彼女を愛したれば彼女歸嫁して後屢ば父の家に歸寧歡を膝下に奉じたり始め良人の官游して他郷に到るや父の家を去る百里餘されど彼女は毎歳父の家を見舞ふこと怠らざりしと父素と名を山林に託すと雖も未だ全く塵世の緣を絶たず是れを以て常に賓客往來頗る筆硯の精を殺ぐありしも而かも彼女の到るを聞くや乃ち眉を伸べて破顔一笑して之を迎へたりと。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

曾て彼女の一男を擧ぐるや婿氏は喜んで彼女の父の許に書を齎らして云ふ産後甚だ健なりと去れど彼女の父の婆心周到なるや直ちに返書して云ふ樣多く健なれば尤も飮食を愼まざるべからず寒暖を忽かせにすべからずと懇に申し遣りたり、越へて十日にして病み二十日にして遂に沒したり父も婿氏もいたく痛恨落膽したりと、始め婿氏の家日に落ち貧困に加はりたれども彼女は此の間に處して備さに艱難辛苦を嘗め怡然之に安んじ婿氏と詩を相ひ唱和し子女を敎育するに餘念なかりしと嗚呼彼女も亦た獲難きの夫人なる哉。

彼女の家庭の艱難なりしことは彼女の詩中其の消息を道破して轉た悽惋に堪へざるものあり、然れども其の辭を措くや多くは風流微婉にして誠に柔軟性の天眞を露出し來りて情趣掬すべし。

彼女は沒するの前其の躬らの詩を取て煨燼の中に投じて一縷の煙に化せしめたり、顧ふに是れ其の何故たるを知らずと雖も恐らくは彼女は其の死後漫りに女流として世に詩名を作すを憚かり怕れたるの故なるなからんや、アヽ亦た可憐ならずや、去れば茲に抄出するものも亦た彼女の父氏兄氏姉氏等の手によりて僅かに存留したるものに係かる、嗟呼惜むべし天此の閨秀の詩人に年華を假さずして啻に女流詩人の名を轟かすのみならず乃ち空しく此の悽愴傷心の事を贏し得て多情余の如き者をして懐を作し難からしむることを。

一月諱日曉起啼鳥聲々裏に於て　江左仙史記す

詩

寄呈家嚴慈

年來憔悴强爲歡。一寸愁腸欲寫難。料得高堂思女苦。數行聊以勸加餐。

有感示外子靜壹齋主人

人世勞勞眼倦開。鏡中雙鬢漸相催。松筠總耐風霜苦。鴻鵠須防燕雀猜。憶母衰年空有淚。相夫壯歲愧無才。停鍼自惜窗前影。一寸輕移不再來。

聞松泉大兄應省試沒於杭州寓次哭之以詩

曉來聞訃淚千行。回首音容隔渺茫。太息功名今已矣。平生薄命誤文章。未折蟾宮桂一枝。生憎天道太無知。最憐旅館燈殘夜。一縷愁魂欲斷時。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

感懷示靜壹主人

寂寥門巷雀張羅。搔首呼天可奈何。夫婿靑衫猶黯淡。老親白髮已婆娑。高山流水知音少。覆雨翻雲感慨多。惆悵不如歸去好。湖山舊約久蹉跎。

重門寂寂掩斜暉。病裏頻驚減帶圍。救水難供徒作客。蒓鱸雖好未能歸。滿懷情緒隨秋冷。一點愁心逐雁飛。落葉打窗蕭瑟甚。爲兒燈下補寒衣。

靜壹主人賦詩贈別因次其韻

珍重輕帆返故鄉。莫教憔悴苦思量。無情流水傷南浦。回首慈雲痛北堂。怨別但頻垂寄淚。多愁翻得病成痾。消魂不盡心中事。相對無言又夕陽。

用　家大人吳中唱和集韻贈靜壹主人

共領清貧味自腴。貧心樂事未應無。酒因量淺斟宜淺。花爲香濃轉覺臞。百結愁絲空纏綣。半生吟夢笑癡迂。代來伯勞蕭蕭雨。不種芭蕉[illegible]綠浦。

入都叩別　家大人

最是傷心處。牽衣欲別時。親年雖未老。兒病已成癡。寒暖宜珍重。晨昏善護持。雲山千里隔。何日是歸期。

秋夜不寐有懷　家嚴慈

殘燈無焰影依稀。淚點盈盈濕繡衣。寄語高堂休苦憶。今宵有夢入慈幃。

憶舊述懷

幾回搔首憶從前。五柳園中嬉戲年。卻倚嬌痴偷出學。落花風裏拜榆錢。

紗廚冰簟日初長。風過紅蓮淡淡香。最愛晚涼明月好。滿庭花影捉迷藏。

一鈎新月透疏櫺。賸雕香殘酒半醒。笑道今朝逢七夕。花陰乞巧拜雙星。

歲暮閨中樂事賒。雲鬟隨意挽雙丫。般勤盛取梅梢雪。小閣圍鑪自煮茶。

淺碧深紅學剪裁。忽驚鼙鼓渡江來。可憐拋卻園丁去。一樹桃花半未開。

連天烽火夢魂驚。一棹扁舟過越城。姊妹相逢無限意。聯牀情話望升平。

避室倉皇賦北征。津門小住度三更。驪歌一曲于歸去。二月春光滿帝城。

夫婿溫涼病延時。畫眉窗下日遲遲。自憐少小嬌痴甚。家事艱難總不知。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

扁舟一棹返吳門。膝下依依笑語温。水路相離三百里。一年一度伴晨昏。

越水吳山興未除。一官重又入京華。浮生應被閒鷗笑。抛卻名山計已差。

名場擾擾未能逃。馬足車塵改髮毛。得失榮枯身外事。且將杯酒讀離騷。

綠暗紅稀滿眼愁。故園回首枉凝眸。劇憐身世如萍梗。慚愧當年舊仕樓。

九月寄　家大人書因題紙尾。

回思去歲重陽日。笑語相陪上小樓。今日客中顏頼甚。一庭風雨獨悲秋。

懷雲裳伯姉。

幾番徹雨釀春寒。惜別情懷欲遣難。盡日東風簾半捲。無言倚偏畫欄干。

別來病骨强支持。萬種離愁祗自知。空有夢魂飛不到。但憑鳳紙寄相思。

杜宇聲聲最怕聞。花陰徒倚又斜曛。年來多少閑愁恨。半爲憐春半憶君。

博山香燼篆煙消。寂寂紅窗玉漏迢。永夜思君眠未得。殘燈幾度手頻挑。

使女福兒從小隨余頗彗、於其嫁也、口占絶句、四首送之。

五載萍居帝里時。艱難況味爾偏知。而今相贈無多物。一紙紅牋遣嫁時。

添香煮茗伴黄昏。問字粧臺笑語温。此日臨歧何限意。縱無別涙也消魂。

咫尺相離是比隣。良辰猶喜正逢春。將軍莫惜纏頭貰。蓮出淤泥不染塵。

髫齡嬉戲雨相憐。伴我于歸十二年。願汝無違勤夙夜。鑑斯他日慶緜緜。

彼女の辭を出すや清新吐囑比くの若きものあり而して其の長を敬ひ少を思ふの切なる其の掬すべきの同情は滿紙溢出するを覺ふ聞く彼女は小詩よりも頗る彼の詞なるものに長じ居たりと惜ひ哉今ま多くを存せず思ふに是れ冷灰の中に葬られたるなるべし。

つれ〴〵草

つれ〴〵の記

中川の里　秋葉子

一、思ひいづるふし〴〵、かいつけ置くも、つれ〴〵なる折の、なぐさみにこそ候へ。

一、冬の日の、今ふはいつになく、春めきにければ、ひとり、書院にさしむかふも、口をしく、日あたりよき、松原なりとさまよひて、靜かにいのり、また文よむ樂しみなどとるべしやとて、家人にはつげもせず、面白しとおもふ書物、一二冊かいさぐり、秋葉の丘の南にありけば、こはそもいかに、此處にもはや、浮世の人は居りけり、松林は商人にうられて、今日は杣人の山入れとかすなる、見にくきすがたしたる人の、酒樽片手に、鄙唄のどよみ聲も、いとゞ興さめければ、すとわき路とりて、向ひの岡のそこに、樂しき文をよまれ、恭しき祈も、いと能力あるが如くさびられし、歸り路たゞ今頃は、天氣俄かにかはり、雪などちらほらと降りしも、さしたるとはなかりき。

一、若き女の、途中にて行遇ふとあるに、ひとの方、あくまで見つめながらすぐるは、さて心にくきものなれ。

一、世にあるべきものゝなきほど、悲しきものはなし、さらば夜靜まり、枕邊さびしく、夢冴へたるとき、父にも母にも別れたる、人の心をおもひやるべし。

一、月のきよさに心うかれ、そこはかとなくさまよひ行けば、人なき如く靜かなる、離れやしきの小窓より、燈火のもるゝに、罪ある業なりとおもへど、ひそやかに立寄りて垣間見れば、まだ年若きおとめのひとり、燈も得立てで、文よみ居るさまなど見ゆるも、ゆかしくまたなつかし。

一、道の邊に生えしげれる、草の花一と本、手にとりてつく〴〵となかめ見よ。如何許りひらけ行く御代の、人の手業にも、其の花の一とひらさへ、造り出すべくもあらずとおもへば、人ほどたよりなきものはあらじ。

一、清きもの。岩間をさら〳〵と迸る清水、月夜の白梅、赤子の笑顔、蓮花の露、祈りの心、雪の曙、妹の親切など、其外くさ〴〵あるべし。

一、常〳〵、世のためまた國のためならんには、いのちも財産

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

も、捨てゝこそ繋くさめなど、口にする人ありけり。さてはこの人、中〳〵に涙多き御方なりとおもひ、或時、奈須野ヶ原に、夫婦して憐れなる世の孤兒をやしなひ居らるゝ曉星園主のことなど、細〳〵と書いつけ、御心に殊勝なりと思ふふしの候はゞ、多少の力をそへ給はれ、それがし園主までは、取次の勞をとり侍らんにこそ、いひ遣りつるに、はや其後程經るも、今に何の挨拶もなし。

一、常盤にほこる松さへも、いとふ蔭もなく、吹きすさむ、寒風には、流石撓みの色みへて、哀れのすがたはかなしや。

ひとしれす春をこそまてはらふへき
　　人なき宿にふれるしら雪
かね盛

●女學雜誌の近刊に「ゆく春の記」あり悲慘なる物語なりよみて行くによそ事とは思はれぬ節ありて覺えず涙を落しぬたゞ細川をして褒心せしめたるは過ぎたりわれはその作者の名こそ知らまほしけれ同し雜誌「春花に似たる婦人、秋草に似たる婦人」といふ一篇嚴木氏の筆と覺しいも麗はしき筆ながら取分けて柔婉の辭婦人に同情を表したるめでたしさもめでたし

（日本人第八號二月三日）

●女學雜誌　赤表白表の二部に分ち隔週發行の定めなりしが此歳より改めて再び毎週發行の定めとしぬあまたゝび困難の境を切拔けて基礎を固めたるもの婦人雜誌の中には此外になければ自ら其社會に力あるものならん

（時事新報一月廿八日）

文藝

同訓異義（三）

五回に分載す

キ

キハマル

窮 窮屈ゆきつまりてさきのなき事　窮―困―みなつまる事

鞠 せりつめうごきのされぬやうにする事、きはむとよむ時は鞫と同

極 至極のところまでしつめる事

究 そのところまでおしきはめる事、なんづまりの事

鞫 罪狀を問ひきはめる事

研 研同、すりみがきて微密にきはめる事

キク

聞 聲のして耳にはいる事

聆 そのことを耳をとめてきく事

聽 きゝいるゝ事

可 かなりとする事それをきゝてよしとする事

キル

剪 兩方からはさんできるはさみきる事

截 すりこみきりわける事たちはげる事

斫 きりてはれる事力を以てきる事

薙 草をかりのそく事なぎすてる事

切 きって二つにはなす事きってほどよくそろへる事

斬 きりて別々にする事

斷 きってはなす事

塹 きりさる事芟同

キビシ

稠 草などのあき地もなくひつしりとはへしく事

嚴 手ざしもならぬやうなげんじうな事

緻 糸の目のよくつまりたる事

密 跡の反―間のよくつまりすきのなき事

キエル

熄 火のきえる事又火をたくはへる事

滅 火のきえへてしまふ事、たえる事、つくる事

消 物のつきてなくなりてしまう事、雪―水―のるい

湮 消―とつゞく消は形のなくなりてしまふ事湮は形うすくなる事

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

キズ

疵瑕玼 きづつきたるあたりのできたる事ひなづのできたる事ちよぼりさしたあざのつきたるを云玉のきづ又玉色のいさぎよき事

痍創傷 瘡なさのなりてあざになつたるを云きりこみのあざのつく事きりきづの事きづのつく事

キザス

萠徵 草のはへ出んとして内にその形をそなへる事そのしるしのさくあらはる事

兆 こうなるさ云やうすのさくよりみへる事

ク

クダク

碎 くだきてこまかにする事

摧 竹木或は家又は器のくだける事又くじく事

クジク

拉挫 をしひしぐ事つまみくだく事をしひしく事をさへつぶす事

折閃 かゞめておる事面ーはりせめる事引ちがへる事、骨のつかひのはづれたるをくじき引ちがへる事

クヅル

崩隕 高く積ものゝくつる事天子の死を一さ云高よりくつれて下へくだる事

頽壞 だれて下にくづれおつる事西ーは日の西にかたむく事くづれやぶる事、城門などのくづれたるに用

クラシ

暗晦旰暮憎 日月燭火のあかりの見さる事義理を知さる心のもやうを云日光を人の見ぬ方にうくるを以つごもりさ云故にくらき事にもなる日の晩景になつてくらき事日景西に沈て地上のくらくなる事心亂てくらき事又無知の事

昧暝昏冥黯 物の色のわかれさる事草ーはさだまらざる事冥さ同して用日景の西に沈て物のあやめの見ぬくらき中に空虛の意あり色の黑くしてくらき事

クルシム

苦窘 いやな事をうけて術なく思ふ事向のせまりてゆきところなき事

困毒 うごきのされぬやうななんぎな事いやな事を以てゆきてこまらせる氣味

クム

汲酌戽 水を井にくみ引上る事つりあけるに休息のなき事酒をくむ事辭を取つて行ふ事大なるしやくを以てくむ事

挹斟㪺 くみてその所へもちゆく氣味、くみさる事くみて行事酌を入てくまんさする事

クラベル

較比 その分量をくらへ合す事ひさしからざるものをくらべ合事ならべてみ合す事かんがえはかる事

校方 ならべかんがふる事ー合は引合みくらべる事此を以彼にくらべてみる事たくらべる事

クハシ

精詳審 よくしらげたる米の事あらきもののけてしまふたきつすいの所略の反一々しらべてくはしくする事、つまびらかさもよむさくさぎんみしてたしかにする事

粹悉曲 あらきものをよりのけてすくりたてたる事、まぜりなき事一々のこさすつまびらかにつくす事、こと〴〵くさもよむ一々つまびらかにゆきとゞく氣味

クモル

陰曖曨 カゲの部に出日光をおほひさへぎるものゝでける事物かげになつてみえぬ事曖ーは日の不レ明事氣にをほはれて日月のをぼろにみえる事

曇曀 くものしきわたしてそらのくもる事かすみてみえぬ事

クロシ

黑黝黧 くろきいろ北方ノ色物ス一は儵レ如ニ烟煤一すこし靑みを帶たる氣味すこし黃を帶たるいろ

黟黔玄 ものかげになりて色のくろく見ゆる氣味黃を帶たるいろ一首は民の事遠く深くして明の及はさるところの色

ケ

ケヅル

鑢 やすりとよむ、其外面をすりおろす事
刪 けづりて定木をあてる事 それを切のける事
刮 けづりのける事 こそげとる事

ケハシ

嶮 山のけはしくしてふみはつしそふな所
峻 山の高くけはしきを云
阻 水曰レ阻絶して道路なきを云

ケガル

汙 汚同、たまりて不レ流水の事、よごれきはづく事
瀆 易再三ー又下夾不レー
點 墨にてちよぼりとてんをつける事 潔白なるものにきずの付事
垢 あかのつきてむさき事

コ

コヒ子ガフ

冀 なにとぞかくしたしと心まちに思ふ事
希 かくあれかしと心かけのぞみねがふ事
忩 もう再びせぬ心になりたる事 それにこりたる事

コビル

媚 人にかはゆがらるゝやうにしごなす事
嫵 笑顔に人の氣を引こと
阿 曲て人に従ふ事 阿曲より轉し來

コトバ

言 音が心にあることを口に出して人に言ひきかす事

剋 けづりとる事
削 けづる事、古は竹簡に書す あやまりかきそこなふときにはーレ之
剡 けづりとがらす事 けづりてかどをたてる事
岨 山石を戴たるけんその所
險 峻同は水の深くしてはかるべからざる事
峭 けづりたてたるやうなけはしきやうすの山
涴 泥の物につきてむさくきたなくみへる事
褻 人に見せられぬびろうな氣味
穢 田中に雜草のはへてむさくさとしてきたなき事
衊 血にまぶれてむさくきたなき事
覬 かくあれかしとうかゞひねがふ事
覦 そのやうすをうかゞひねがふ事
庶 冀同、近き縁なり
娬 人あいのしほらしきやうすを云
諂 諂諛並同、人にこびへつらふ事
嬌 そのやうすの目にとまる事
詞 文句つゞきのあやある事

辭 詞と通、詞は言の助なり 辭は訟理なり

コフ

丐 こひうけて吾が物にする事、くれる事
請 こうて我方へつくやうにする事

コトフ

答 向の問によつてうけになりてこたへる事
應 感の反、それにこたへる事

コヽロヨシ

快 心に思ふ通になつてくる事
恔 こゝろよき事孟子註快也 於二人心一無二獨一乎

ゴトシ

如 そのやうなこのやうなと云ふ
似 近体詩に若をごとしと用ゆるに多ーの字を用

コエル

肥 痩の反、肉のついてみえる事
胖 様子のゆつたりとした事 大なる事

コト〳〵ク

畢 兎をとるあみを以てお おてもらさぬ事
悉 一々のこさぬ事

コヘル

超 おどりこへとびこへる事並 よりは一段はれこへる事
跨 その所よりまたかりて外に及ふ事

コレ

乞 かふてそれを我にうける事
謁 いゝいれ見へる事
對 目上の人にこたへる事
諾 のみこみゆるす事 以レ言許レ人を云
慊 思ふ通りになり意にかなひたる事
若 如と同義なり
猶 疑ひ多き獸の名、此を彼にくらべて見れば丁と同きが如なれともと云氣味
腴 肉づきて油のゝる事 肥田府ー
豐 ゆつたりとした事そのやうすのふつとりとした事
盡 そこをたゝく氣味
越 こちらをはなれて向へ入こむ事ー界ー牆のるい
踰 越同

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

之 上下の文に指さころあり上下の文に指さころなしに文字を用ろとままあり

是 上を受け下を定ろことば是集議所レ生者云々

維 語の辭、詩經に多くあり

這 凡稱ニ此箇一爲ニ者箇一俗多改レ一

茲 斯さ音近く意もまた同、書に多くあり

惟 維さ同、發語の辭、書に多くあり

諸 之乎の義にてやさよむ之於の義にて二さよむたゝこれをよむとまゝあり

此 彼の反事ら事物をさす是の字さ義大に別なり

時 是さ義同、書に多くあり

斯 此の義に用て此より輕し詩書に多くあり

伊 惟さ音近して義同、詩に多りあり

外報

万國婦人禁酒會の決議

萬國婦人禁酒會第二總會は、昨年十月十六日を以て米國に於て開會せられ、翌十七日支那禁酒會委員さして出席せられたるラス、シャフナー孃は起て委員會の決議を朗讀せられたり、その文に曰く

緒言

萬國婦人禁酒會第二總會は過くろ二年間に於ける本會の進歩を認め、特に吾人か爲したる成効の如きは一に我大能の御手に歸せるものなるとを信して、滿腔の精神を以て、大能大慈の上帝に感謝さ賛美さを捧ぐ

本會は熟慮討議の末遂に左の條々を議決せり、今之を一同委員諸君に報告す

(一)本會は堅忍不屈の精神を以て、諸君か代表せられたる諸國民の前に禁酒の主義を主張し。殊にアルコール及ひ他麻睡劑か東西兩洋の進歩上に來す害惡を認め、之か賣買貿易を禁止するは政府か當に爲すへき責任なるを確信し。且つ此主義に對し同志者を廣く天下に求めんとを議決す

(二)本會々員はその何れの地にあるを問はす、本會の主義を擴張するの責任あるものにして。殊に白票を帶ふるは會員か本會に對する忠實の心を代表するのみならす、また間接に本會主張の擴張に關係あるを以て、會員はその内にあると否さに關せす、常に之を帶用すへく。且つ旅行等の節は勉めて基督教會の人を導ひて、本會々員の籍に列せしめ以て地球上全教會の力を借りて本會主義の擴張せられんとを勉むへきと

本會は進歩の人類の法則たるとさ、自由の發達に須要なるとを認むるを以て尙下の如き議決をなせり

(三)本會々員は一同男女同權なると、及ひ世人をして政事上男女の同權なるとを認めしむろは、一般社會改良上最良の方法たるとを信すると

四、不幸にして一旦緩急國際間平和の破れんさするの危機に際せは、須らく我等か信する万能の神に祈つて戰鬪の厄を免れしめ玉はんとを祈り、殊に一同各自の政府に嘆願して、談合調停平和の局を結はんとを求めさるへからざるを

(五)本會は深く彼の來らんさする一千九百年、即ち基督降誕一千九百年期に當り全地球基督教會同一の祝賀を催さんさの建議を贊し、之を催するの順序各國その日を異にせしめ、世界周遊の旅客、傳道者等をして、各所此會に列するを得るの便宜を得せしめんとを希望し、本月を以て本會々長は三名の委員を指名し、此委員をして万國基督教會日曜學校委員役員及ひその他各種團体の委員諸君を招待せしめ、互に此祝賀に對するの準備をなさしんことを決議す

(六)本會は深く万國日曜學校總會か近頃セント、ルイスに於てなしたる決議を贊し、爾後その會か雜誌を四季に發行せんさする計畫あるを喜ひ、世人をして成るへく廣く同會に加はり以てその利益を得せしめんとを勉むへし

(七)本會印度に於て毎十年一回開會する傳道會議の決議を悲しみ、該會か非阿片貿易、非飲料貿易等一切法律上是認せられたる惡德さ併せて、社會改良の決議を廢棄したるを見て深く之に吊詞を呈す

(八)本會はシ、ユニオン、シグナル雜誌が万國婦人禁酒會交互交通の好機關たるを認め、會員一同益々その販路を擴め以て之をしてますく有益のものたらんとを勉めんとを決す

(九)本會は深く厚くアッケルマン孃、エリザベス、ホイーラー、アンドリュー夫人、及ひ博士ケート、パヅシュ子ル君等か世界万國に對してなされたる献身的の事業に同情を表し、殊にアンドリュー夫人ヒパシュ子ル博士か印度に於ける成功の溶大さ必要さを認識す

(十)本會は万國婦人禁酒會總理フランシス、イー、ウイラード孃か疾病の爲め遂に本會に列する能はさるの不幸を思ふて深く悲嘆の情に迫る。尙此後總理かその健康を回復して、その久しく企圖したる万國政府に對する同盟請願の擧を實行するの日の速かならんとを希望して止ます

(十一)本會は忠實なる親友メーリー、アレン、ウエスト孃か犧牲身を本會事業のために獻け、遂に万里東洋の地に獨獨立の命を終りしを思ひて深く同情悲傷の思を寄し、その紀念を録せんとを決議す、本會はまた同孃の疾病中孃かために盡され且つ死後その遺骨を鄕地に送附せられたる根本君始め幾多の日本人諸君及ひ彼地に在る我同胞米國人に對し、厚く感謝の詞を呈す

(十二)本會はセニー、カセデー君か必す已に厚信の榮報を受けられたるとを信し他日復活の希望を以てその名を登錄せんとを決定す

(十二)我万國婦人禁酒會は諸君か種々なる道德的集合体の代表者を優待せられたる厚意を思ふて婦人万國會議委員諸君に謝し。本會の開會に當り當國に來駕せられ、本會々長さして親切熱心に盡力せられたるヘンリー、ソマーセット夫人に對して夫人か本會の盡力を併せて、今迄我總理さその書記官マンナ、ゴルドン嬢に現はされたる厚情を謝し。種々奬勵の旨を致されたる牧師さア

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りス、ゼー、ハリス孃を始め本會開會中音樂の勞を採られたる諸君に對して感謝の意を表し、終りに本會の事業を助けられたる新聞通信者さその他の諸君の勞を思ふて厚く之を鳴謝す

時報

◎皇室

●銀婚式　來る三月九日は　陛下御結婚後二十五年目に渉らせらるゝを以て西洋諸國の儀例に倣はせられ銀婚式の大典を御擧行遊はさるゝ由に承れり

●大典の御擧行に就て　宮内省は目下萬般の準備に着手中なるが當日は新年の御儀式節の如く諸親王及妃殿下各大臣各國公使各省文武勅奏任官等は宮中豐明殿に參賀し　聖上皇后兩陛下は同殿に出御の上親しく之を受けさせられ夫より鳳凰の閧に御祝宴を開かせられ夜に入りては尙ほ百官の人々を召させられて古代の舞樂を催はせ給ふ御都合にて各地方長官にも拜賀のため特に上京する由又銀婚式の紀念章をも御製定下賜さるゝ筈なりさ就ては府下市内に於ては其祝意を表せんため各戶國旗を揚げて兩陛下の萬歲を祝し奉るは勿論憲法發布式節の如く辻々に壯嚴なる花門を造り最も盛んなる祝賀式を擧げんさ已に準備に着手せし區内もあるよし

●御慶事の御費用　銀婚式大典に關する諸御儀式及び其の費用の詳細は目下頻りに宮内省にて調査最中なるが余體の御規模の餘程御盛典たるは疑ひなく我國斯る御儀式は未曾有の事さて其準備は一に憲法發布式に倣はせらるゝやに漏れ聞きぬ其御費用凡そ八十萬圓に達する由全國八十歲以上の者に五十錢宛九十歲以上の者に一圓宛百歲以上の者に一圓五十錢宛の養老金を惠ませ賜ふ金高計りにても既に概ね十六七萬圓の多きに上り居れりさ畏こきことにこそ

●華族に對する恩典　近來華族諸家中家政往々紊亂して今は其品格を維持するに困むものさへなきに非ず斯の如くにして數十年を經過せば華族の狀態見るに忍びざる慘況に陷らんも圖られず　皇室の藩屛たる華族、到底此儘に放擲し置く可からずさて其筋に於ても種々評議ありし由なるが來る三月九日を期し御執行あらせらるゝ銀婚御式は未曾有の盛典なるを以て此日に際し種々の恩典を擧げさせらるる其中に華族諸家に對して內帑より巨額の下賜金あり之を一所に積立て置き家政の困難なる者あるに當り之より支出して財政維持の資に供するが如き方法を設け華族家政永續資金とも申すべき性質の恩賜金あるならんさ云へり(時事新報)

●宮中の夜會　銀婚式の當日は去る明治廿二年憲法發布式の時に御催ほしありたる如く古來未曾有の大典なれは宮中に於て夜會の御催ほしあるやに承れり

●各顯官の獻上品　銀婚御式を奉祝する爲め全國の臣民に種々の趣向あることは近々傳聞する所なるが各國務大臣、樞密顧問官凡そ十五六名協議して銀製の雞二羽(一羽凡一貫目)を獻上する計畫なりさ

●銀婚式奉祝の協議　横濱の市參事會員及び市會議員等が　天皇皇后兩陛下銀婚式の大典に就き祝意を表し奉らんが爲め不日市會を開き其の準備を協議する筈なりさ又同市貿易商組合にても夫々奉祝の協議中なりさ

◎美談

●女の榮譽　福島縣宇多郡松ヶ江村大字北小泉士族荒數馬の妻よし(四十八)は元治元年中今の所天數馬の妻さなりしが拮据黽勉よく農業を勵み曾て怠ることなしさ雖も家業赤貧加ふるに舅重信は累年狂癲病にかゝり又常に酒を嗜むを以て醉且つ狂しては激怒暴行亂りに人を呵責し嫁よしの如きは最も其苦に遇ひしさ雖もよし女の殊勝なる反覆叮嚀慰諭以て其心を治めしむるに努む人之を賞す明治十三年中夫數馬重病にかゝりて起臥飲食之を自からする能はすよし女再れて此厄に當るや全力さ全心さを傾けて之を看護するとよく晝夜を徹するに至れり如此くして一族殆さ病蓐にあり家事の經理なきを以て貧日に益々甚しく一族數口殆さ饑に瀕すよし女又默するを得す身を擲して粹身粉骨の勞働をなし漸く家族の養育を爲せり人其志操堅忍にして舅に孝に夫に貞にして家族を愛護する男子も遠く及はすさして歎稱して措かす去れは天は此の隱れたる善良の婦人をして永く此邊僻に其名を埋ちしめす遂に此事縣廳に傳はり此度知事より賞狀さ共に金六圓を下賜せられたりさ「福島民報」に見ゆ

●貞操の婦人　長野縣南安曇郡倭村北耕地松澤民治(七十三)さいへる鍛治職の女房シン(六十五)さ稱するは同郡溫村二ッ木耕地二木某の娘にて今より五十餘年前民治の妻さなりしが民治は鍛冶職年季奉公中誤つて左足を折しき一旦平癒せしかも又も再發せしよりシンは神佛に祈願し有さあらゆる藥を買ひ求め看護おさ〳〵怠らさりしかは差しもに重き足痛も五六年にて稍快方さなりしが衰弱し身躰ゆへ夫婦の中に子さてはなかりしよりシンの里より惣吉を連れ來り梓村大久保耕地某の娘サタを配合せ家督まて讓りしが此の夫婦も子寶のなきまゝサタの里よりツタ(十九)さいへるを孫嫁に貰ひ受けしに家内浪風なく最さ睦しく暮せしが民治の足痛は四季おりゝの變り目に多少の苦痛を感すれさ大したともなかりしに四五年前不圖再發し世にも稀れなる僂中務症さなり二六時中膿汁流れ出て起伏も自由ならぬ身體さなりしかはシンは晝夜の區別なく左右に侍り病人の云ふが儘に食物を與へ湯藥を進め看護に餘念なしさは澆季の世には稀有なる德行なりさ四隣のもの皆な云ひ合へりさぞ(信濃)

●孝女　高知縣士族山岡某女史は其身教師の職を奉じたるが日頃いさまめまめしく老父母に事へ其孝行は誰知らぬものなき程なりしが此程同縣知事より左の通り

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

賞典の沙汰ありしよし

高知縣高知市鉄屋敷士族　山岡㚑

資性溫柔平素孝順の志篤く幼にして學業を勵み長じて小學校の教職を奉ず明治十二年父病に臥する數年間、母を扶けて能く看護をなし十八年父遂に病歿越て二年夫亦死歿し家計從ひて窮苦を告げ母漸く老衰し特に病褥を離れざるも奉養益々厚く定省曾て怠らず傍ら多數の兒童を敎育し獨立家政を維持し而して其職に於ても亦欠くるをなし其志操を變ぜざるを變に十有餘年鄕黨擧て之を稱す洵に奇特とす仍て爲其賞金三圓下賜候事

高知縣知事從三位勳三等　石田英吉

●節婦の賞　兵庫縣多可郡黒田庄村の村上とめ女は資性溫順多年舅姑に事へ孝養怠らず殊に舅姑及び夫の病に罹るや日夜力を看護に竭し傍ら家事に精勵し能く幼兒を撫育せし等奇特なりとて今回其筋より金若干を賜はりて之を賞されたり

●奇特なる婦人　大森留學博士の令妹にして當時山形縣南村山郡上の山町大字湯町に產婆を開業し居らるゝ大森まつ子といへる婦人、身はなよ竹の風にも動るぐ軟かなる婦女子にはあれど男も及ばぬ俠氣の富を持ちて貧家と見れば産婦などには謝儀も受けず却つて此ちらより滋養物等を施與して人の知らぬ慈善を施したる事度々なりとの事なるがある雨の日に同町の小學校生徒等の午後の退校の時傘もさゝず足駄も穿かずに衣類をびしよ濡れにしながら走り歸る子供等の哀れなるを見て成程貧乏の者ある家にては可愛ゆ子供を濡らさせじと迎ひの人を出すべきなれども人手不足の貧々の家兩親子供計りの處などにはて仕事を止めて迎ひに行く迄の子供迎ひにも來らざるべし富家も貧家も可愛さ同じ親心誠に氣の毒なる事なりとて此の度傘五十本を新調し人數には足らざるべけれど思ふ心の十分一とて之れを同町の學校に寄附したりと山形日報に見ゆ

◎片々

●谷子爵夫人の儉德　避暑中の事とかよ第壹高等中學校生徒宇津見次郎氏が熱海より歸京の途、國府津より中等列車に乘りける時、谷將軍先づ在りければ進み揖して何角の對話に旅中の鬱を慰めける接て將軍の坐を少し離れて肉づき豐かなる婦人と少童と乘り居けり婦人は衣裳その他とも世の常のものに殊なれる所もなく今しも手に提き糸の縺れを解きつゝ俯向きて他を顧みん遑なきを惜むが如く端然として一語を發せず車の機忙しきにつれ汁の進むいよいよ繁く斯くて大磯停車場に至るも手を舍かず平塚、藤澤、戶塚、程ヶ谷を經て横濱に着くも猶ほ依然たり此の新橋に達する迄は心に手に曾て一たびも絲を離れしとなく將軍の旣に下り立つに及び徐ろにその後ろに附きて車を去りぬ宇津見氏後ち婦人の容貌等を具して日頃谷家に出入する懇友某に語ればそれこそ擬れもなき子爵の夫人にして少童は即ち子の令息なれと語り聞せられ今更らに欽慕の情に堪へざりしとなん子爵が嘗て勤儉尙武の說を貴族院になすや謂へるあり余は市ヶ谷の茅屋に住む故に借金せしとなし政府亦豈無用の贅澤をなすが爲に金を借るへけんやと今婦人の行爲を見るに子の言果して徵あり欽むへきは夫人の儉德なるかな（九州日々新聞一月三十日）

●愼德堂及水哉館　神田區小川町五十七番地中井木菟麿氏は故履軒先生の曾孫にして竹山先生の外玄孫なり氏は今回先儒の經營に係り現時荒廢に歸し居たる愼德堂及水哉館を復興せんとて偏く江湖の贊助を求めつゝある由而て愼德堂（三宅万年先生の創設する所甃菴春樓竹山等の諸儒之を繼承す）は之を女子の敎育所に充て水哉館（履軒講學の所）は女子を嵌除するの場所と爲し同館には別に書籍館を設け先哲の著書は云ふ迄もなく廣く天下の圖書を蒐集して諸生の閲覽に供へ又た兩學館の基跡は今尙ほ大阪に存するも同地は遊士の勤學に不適當なるを以て更らに地を西都隣舒の所に卜し明二十八年即ち履軒先生入洛後百卄年愼德堂創立後百七十年を期し兩學館の再興に着手する由なりと「郵便報知」に見ゆ

●鳥取婦人水災救恤會の結果　鳥取婦人會員其他慈善なる婦人達の發起にて罹災窮民へ衣類、學用品、器具等を贈らんとて設立したる同會の募集結果は衣類一千二百一點、學用品九千百五十七點外に書籍五部、器具百十二點、金八十八圓十九錢五厘に達したるが現金の內二圓十二錢丈けを得ざる雜費として引去り殘額を以て衣類及び學用品を購入し即ち衣類一千五百八點、學用品九千九百二十點外に書籍五部、𥿻、鉛筆、石盤片の袋等十ヶ器具百十二點となし之れを縣廳に托して夫れ〴〵寄贈し玆に目的を遂け了りたれば去る二十六日を以て解散せりと云ふ

◎孤兒の友取次義捐金第拾貳回報告

金三百六拾八圓八拾四錢三厘	第十一回迄取次高合計	
金五錢	東京無名氏	孤兒之友準備金へ
金一圓八拾錢	東京明治女學校　愛の時（廿六年九月分）	孤女學院へ
金拾五錢	東京無名氏	孤兒之友準備金へ
金貳拾錢	千葉縣無名氏（廿六年十一、十二月分）	孤女學院へ
金三拾錢	同　同	同
金貳圓	伊藤安子氏より	暁星園へ
金五錢	東京無名氏	孤兒之友準備金へ

合計金三百七拾三圓三拾九錢三厘

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

樋口忠子著

基督教

此書素と樋口忠子氏唯少しく基督教の主旨を某中學校學生諸氏に知らしめんが爲めに稿を成したるもの、故に青年諸氏の爲めに謀るもの多し。頃日信天社主人故あり東都にあり此稿を二三の大家に示す、皆勸むるに之を世に公けにするとを以てす、乃ち訓諭に從ひ直ちに印刷に付し妄りに世に公けにす。若し夫れ其小冊子たるを笑ふなく其著者の婦人たるを蔑するなく青年學生諸氏の一讀を得ば幸甚とす。

一月廿五日發兌
正價郵送料共 金四錢
郵劵代用諾す

發兌所 大和國郡山町小川町 信天社

近藤嘉三先生著 諸大家序文

言語作法 貴女の心得

全一冊 賣價十四錢 郵稅四錢

表紙石版美本菊版大形圖畫六十餘挿入

本書略目次は淑女の心得夫人の心得化粧の要訣談話の心得訪問の心得賓客接遇の心得室內粧飾法和歌の書方香道の心得茶道の心得新式和洋挿花法家庭衞生法等其他數科にして一々圖畫を以て之を平易に說明し其數科の內一科を心得るも有益の書なり所謂貴女の位置眞價を進んとする婦女諸君本書を一讀せられなは本書は實に夫人の教師として淑女の朋友として而かも眞成に多識多藝なる良師良友を得たると同し價値を有し眞の貴女たるを得ん

賣捌所 東京市神田區表神保町六番地 女學雜誌社書店

鈴木弘恭大人講述

第五版 百人一首講義

（附錄小倉てびき）

正價金廿八錢 郵稅六錢

御高評を得たる百人一首注文いよ〳〵多く第四版品切に成りたれば玆に第五版を印行し、且つ「小倉てびき」と云ふ、極めて便利の見出を添ゆ、之によりて、百人一首それ〳〵の歌の句の在り處、意味、よみ手などを直ちに見出すとを得て至極重寶なり。

鈴木弘恭大人著述

改正增補 文法口授

全 實價金十二錢 郵稅金二錢

右は文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて目次、文と云もの、譯、章句段節の譯、文を作るに容易なる譯、多く文を作るを善とする譯、文を作る工夫の事草稿の譯、幷に書方、文を練磨する事、文を作るに病癖ある事、佳篇を作る法、文を培養する法、種々の文例等なり

鈴木弘恭大人口述

雅俗諸躰 作文口授

全 實價金二十錢 郵稅金四錢

此書は大人か各學校に於て實地に授業したる者を筆記したるなれば國文の作例は勿論許多の熟語をも擧られたり此書を一目せば如何なる初學者と雖も消息記事論說諸躰の雅文を立所になし得らるべし諸君速に購て試み給へ

發行所 女學雜誌社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

高等女子師範學校長 從三位細川潤次郎君題字
中島知子著 岡田廣鶴女史挿畫

校正

日本の裁縫と女禮

第二版 和裝本全二冊金四十六錢郵稅不要

本書は縫ぬぎの初歩より衣服袴等に至るまで順序を逐ひ裁方縫方並道具の使用法まで一々圖解を以て叮嚀に談の躰に書綴尙物事にふれて女禮をも夥多の彩美書を加へて說き示し師を要せず女子の道を悉く知る寶典なり第一版は賞品等適當とて好評を得て既に賣盡し今更に校訂再版出來せり婦女方は早く購められよ

女子消息

文のかきふり

小野鵞堂先生書

上下二冊

實價金三拾六錢 郵稅金六錢

女子の書牘は、おのづから其かきぶり存するなると、近來玆に注意する人々稀にして、眞字がちにこち〳〵しき漢語をまじえ、おのこどもの書きなすものと、別ちなきやうに見ゆるそうたてき。そも〳〵文は、その書きふりうるはしければ、なんとなうゆかしく覺ゆるものなるを、女子にふさはしからぬ、とげ〳〵しき文字のみ流行すなれば、いかてと思ひたちて、連綿墨つぎの法を考え『御候』字なとのおき所をたゞし、熟語を除くほかに、多く假字文字を用ゐたり。云々編者誌す

同

高等

女子文かきふり

實價金三拾二錢 郵稅金六錢

この書も亦女子が書翰のかきぶり、八拾壹題百四拾一章をつらねたる女子手跡の模範とすべきものなり。

賣捌所 東京神田表神保町六番地 女學雜誌社書店

文學界

新年初刊

第十三號目次

スミルナの花 禿木
變調論 秋骨
草枕 無名氏
春の光 秋香女
夕顔ぐるひ 破蓮
片羽の鴛鴦 孤蝶

時文

○淨瑠璃史
○美妙齋新脚本
○競べ馬
○三躰詩評釋
○春陽堂新刊
○去歲のマドンナ

一月三十日發兌

毎月一回發兌○定價東京市內一冊六錢○市外郵稅共一冊六錢五厘○廣告料一行一回拾錢○文學上有益の創作等は無代價にて廣告を引受く

東京神田表神保町六番地 文學界雜誌社

廣告

本院今般岡山孤兒院に合併致候也

名古屋市白壁町
震災孤兒院

前文部大臣海軍中將
從二位勳一等子爵　榎本武揚題字

醫科大學産科學
婦人科學教授　醫學博士濱田玄達先生

醫科大學小兒科
學教授　醫學博士弘田長先生　校閲

文部省學校衛生事項取調囑
託帝國大學大學院醫學士　三島通良先生編述

皇后陛下御覽

はゝのつとめ

增補訂正第五版　美濃入日本綴美本

全二冊　定價金五十錢　郵稅金六錢

目録

親の巻

第一章　妊娠
第二章　妊娠中の養生
第三章　出産
第四章　産蓐

子の巻

第一章　小兒教養法の精神
第二章　人乳
第三章　乳母法
第四章　人工養育法
第五章　生歯迄の小兒教養法
第六章　生歯
第七章　生歯後夜の小兒教養法
第八章　種痘
第九章　小兒の疾病及攝生法
第十章　身體の發育智識の發達より就學兒となる迄の母の職務

賣捌所　東京神田表神保町六番地
女學雜誌社書店

御おしろいした元祖

純良麝香入新發明ねぢ口輕便入物なるを以て貴婦人に必要の品なり

貴婦人方には御弁利の品なり

東京馬喰町一丁目（電話六五二番）

有名賣藥化粧品類問屋宮内省御用達

岳陽堂　平尾賛平

俳諧史傳

近刊

◉小此木、布川兩氏の著『俳諧史傳』正さに出むとす。嘗て『城南評論』『評論』の紙上、多少の讀者をして其精細なる筆法に傾倒せしめたる兩三篇は、實に斯の書中の一部のみ。

◉思ふに、俳諧は我文學史上に、一大特殊の光明を煥發し、三百年の間、庶民の美妙なる想念を蕩漾せしめ、豪宕なる漢詩、優婉なる和歌以外、別に、幽玄、閑寂、悲壯、沈痛なる詩天地に逍遙せり。

◉俳諧は和歌に孕まれ、連歌に興り、松永貞德となりて、諧謔を擅にし、西山宗因となりて、奇巧好笑なる壇林の花を咲かしめ、更に、詩聖松尾芭蕉の大手腕をかつて、正風俳諧となり、平民的叙情短歌の面目を構成す。

◉其源流に遡り、其發達を討ね、其推移を叙し、其變遷を記し、其特相を論じ、一讀の下、燦然として讀者の腦裡に斯の文學を活現せしむるものは、我『俳諧史傳』なり。

◉これを分てば俳人個々の傳記となり、これを聯ぬれば、一篇整然たる文學史をなす。逸事ありて、以て興趣を横溢せしめ、名句ありて、以て一誦、天地の幽遠なる秘奧に冥合せしむるに足らむ。

◉若しそれ、一字苟もせす、一筆輕々に下さず、言々證あり、句々據るところあり、而も文章、平易簡明、叙記、精到凱切なるや否やは、世の公論に一任せむのみ。世の俳諧を知らむとするの士、一本を座右に備へば、得るところ豈に鮮少ならむや。

◉今や我社は斯の『俳諧史傳』の印刷に着手せり。讀者の机邊に現るゝは旬日の中にあらむ。敢て豫め公告すると爾かり。

發行所 東京神田表神保町六番地 女學雜誌社書店

女學雜誌定價表

冊數	定價前金	市外定價郵税共
一冊	金六錢	金六錢五厘
十冊	金五十八錢	金六十三錢
廿六冊（半ヶ年分）	金一圓四十三錢	金一圓五十六錢
五十二冊（一ヶ年分）	金二圓六十錢	金二圓八十六錢

一本誌購讀者は代價郵税共凡て前金御拂込之事前金御拂込無之御注文有之候共一切送附不仕候

一本誌代價郵税共郵便小爲替にて拂渡局を必らす

一ッ橋郵便爲替取扱所へ宛御振込の事。

請取人は神田表神保町六番地女學雜誌社と御記入の事。郵便切手代用は一割増（五厘切手に限る）にて申受け候。

一本誌御注文の節は住所姓名を明瞭に記載し號數は何號より何冊分と詳細に御書添への事。

東京市神田區表神保町六番地

發賣所 女學雜誌社書店

明治廿六年四月廿五日内務省許可
明治廿七年二月九日印刷
明治廿七年二月十日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 仝牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京北豊島郡王子村下十條八百五十一番地 女學雜誌社
印刷所 仝牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY